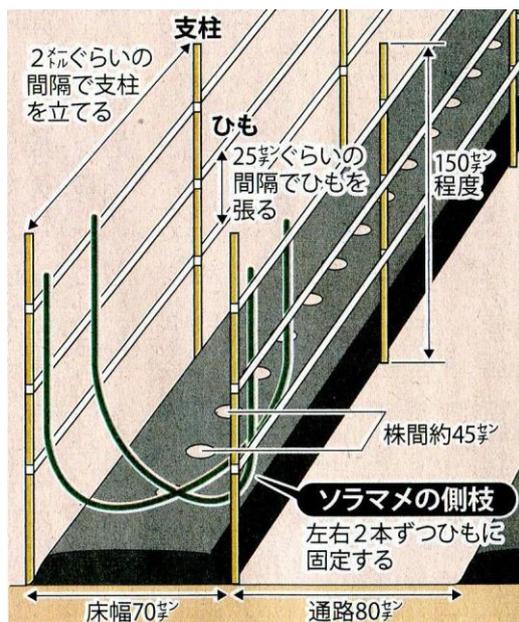




1節1莢残せば肥大

現在、市場に出荷されているソラマメは、子実が1寸（3㍍）程度の大粒種で、鹿児島は全国一の産地です。また、甑島や奄美では、子実の小さい在来ソラマメが栽培され「4月マメ（甑島）」や「ふうマメ（奄美）」と呼ばれています。一般には未成熟の子実を野菜として利用しますが、成熟した子実は、お菓子やみそなどの材料として利用されます。

原産地は地中海沿岸からカスピ海周辺にかけてで、日本へは8世紀に伝わりましたが、本格的に生産されるようになったのは明治時代になってからです。マメ類の中ではタンパク質に富み、炭水化物も多いです。収穫時は気温が高いほどでんぷん含量の増加が早く、獲り遅れると糖含量が減少し、食味が低下するので、適期に収穫しましょう。



生育適温は16～20度で、花芽ができるためには生育中低温に遭遇する必要があります。そのため、指宿などの「夏まき冬どり」作型では、催芽種に4週間の低温処理を行っています。ここでは、低温処理の要らない「秋まき春どり作型」を紹介します。着蕾後、氷点下の強い霜は着莢に影響するので、春先降霜の心配のない場所を選びます。

土壌の適応範囲は広く、排水の良いほ場であれば、普通期水稻後作にも導入できます。1平方㍍に堆肥3キ、苦土石灰100㍉、化学肥料100㍉（窒素、リン酸、カリが15%の場合）程度を施し、耕うんします。畝幅150㍍、床幅70㍍、高さ15㍍程度の畝を作り、黒ポリフィルムで畝を覆います。

播種期は、10月下旬～11月上旬です。株間45㍍程度で、種のへそ（お歯黒）を下にし、2㍍ほど押し込みます。播種後はかん水します。**発芽後、主枝が10㍍程度の長さになったら、本葉を5枚残して摘心します。摘心後、伸びた側枝の中から4本残し、他は切除**します。その後2㍍間隔に左右に支柱を立て、ひもを張ります。徐々に伸びてくる側枝は、左右2本ずつ倒れないようにひもに固定します。また、**株元付近に伸びてくる脇芽は適宜生え際から除去**します。側枝は**25～30節程度で摘心**し、着莢後は、適宜かん水を行い、莢の肥大を促進します。各節に数個の花が咲きますが、1節に1莢残すと子実の大きい莢になります。

収穫期は4月下旬～5月です。莢は下向きになり、子実の肥大で凹凸が見られ、莢色が濃くなります。莢を開くと、へそに薄く黒い線が入ってくるころまでが適期です。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室長）